W-1-1

手話の進化と地域共有手話

矢野羽衣子（総合研究大学院大学博士課程）

背景と目的

言語は人と人をつなげ、社会で生きていくために必要であり、ろう者が使用する言語は音声ではなく手話である。

１.手話は、ジェスチャーからホームサインを経て言語に進化する。手話における言語進化プロセスの各段階を取り上げて、ろうコミュニティが使用する手話と同じ地域のろう者と聴者が使う地域共有手話の特徴を説明し、手話はいつ誕生し、どのように言語に進化したか考察する。

２.ろうコミュニティとは別に、地域共有手話である愛媛県大島の宮窪手話の特徴を説明する。

３.ろう研究者として学術研究に参入する場合の課題や聴研究者に知ってもらいたい点について論じる。

１.手話における言語進化プロセスとは

　手話は音声言語とは異なり、ろうコミュニティが使用する手話言語で自然言語である。手話はジェスチャーからホームサインを経て言語に進化する。

　言語学者のウィリアム・ストーキーが「手話は世界中で使われている音声言語と同様の言語であり、独立した構造と文法を持ち、精緻化した自然言語である」と報告(Stokoe et al. 1965)した。それまでは、手話は単なるコミュニケーション手段であり、言語ではないと認識されていた。
　手指表現を使うコミュニケーション方法にはジェスチャー（身ぶり）・ホームサイン（homesign）・ろうコミュニティの手話言語・地域共有手話などがある。

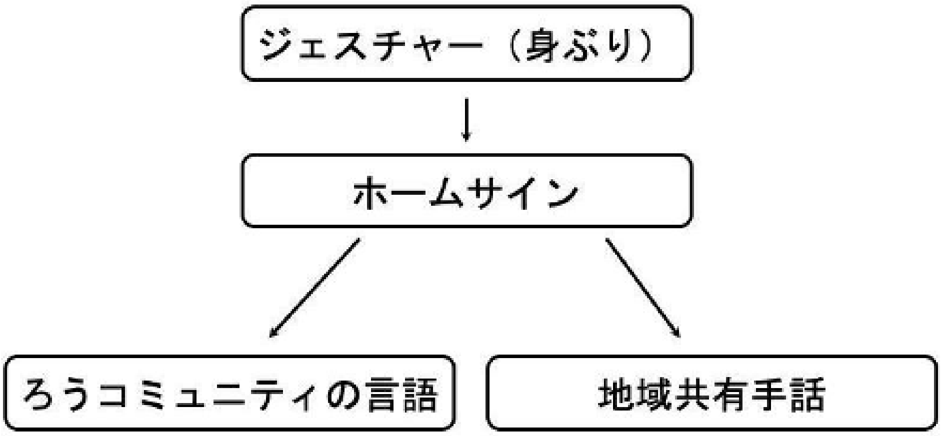

図1　手話の進化プロセス（矢野2023:230）

ジェスチャー

ジェスチャーは、聴者が日常的な会話で使用する身体動作による表現であると考えられる(矢野2020)。ろう者や聴者関係なく誰もがジェスチャーを用いてコミュニケーションすることはできるが、情報や感情（気持ち）を細かく伝えることはきわめて難しい。
（手話のCL(classifier)は一見ジェスチャー(身ぶり)と混同されやすいが、CL にはその国のろうコミュニティで共有された基本の手型や動きのルールがあるため、ジェスチャーとは異なるものである。）

ジェスチャーの特徴

- ・複雑な文を作ることができない
- ・具体的な行動をそのまま同じように真似たり、指さしを使用したりして個人のイメージに合わせて自由に表現されることが多い
- ・情報量も乏しいため、相手に文脈や背景情報がない場合は全て理解してもらうことは困難である
- ・簡単な内容でも、身体を実際に移動させたり向きを変えたりする必要があり、聞き手に理解してもらうのに時間がかかる

つまり、ジェスチャー（身ぶり）はコミュニケーション手段ではあるが、言語としての性質を十分に備えているとはいえない。

ホームサイン

ホームサインはジェスチャー（身ぶり）が視覚的な言語としての性質を一部備えるようになったものである。乳児期から手話言語環境を保証されているのはろう児の10%以下に過ぎない。家族がろうコミュニティの手話言語の存在を知らないため、ジェスチャーやそれに基づくホームサインを使うことが多くみられる(Padden and Humphrise,1988)。

ホームサインの特徴

- ・ホームサインを主に使うのはろう者である（聴の家族は音声主体）
- ・ホームサインを使いこなす聴者は少なく、十分に理解できる聴者は限られている
- ・聴者はホームサインとジェスチャー（身ぶり）の区別ができていない場合が多い
- ・日常生活の動作を模倣して作られた表現もあれば、その場で話者が動きを創り出すものもある
- ・日常生活の動作のどこを切り出すのかは各個人によって違っており、捉え方も変わってくるため、ホームサインは個人によって表出が大きく異なる

ろうコミュニティの手話言語

ろうコミュニティの手話とはジェスチャー（身ぶり）やホームサインが共有され、発展したものである。手話言語へ発展するまでには、以下のニカラグア手話の例（図2）で示すように、ピジンやクレオールのような言語進化の過程を経る（武居2005）。

ニカラグアでは、1977年に初めてろう学校が設立されるまで、ろう児は個々の家庭でホームサインを使って生活しており、広く共有された手話言語はなかった。ろう学校が創立され、最初に就学した第1世代の子どもたちがそれぞれに作ったホームサインが緩やかに共有されてピジン手話というコミュニケーション手段となり、後のニカラグア手話の基盤となった。

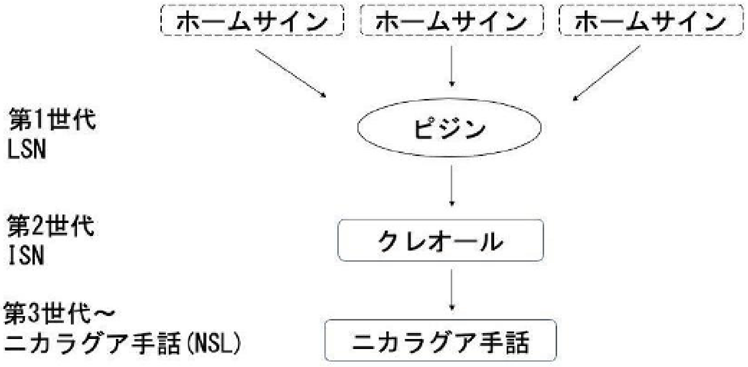

図２　ニカラグア手話の進化

地域共有手話

手話言語はろうコミュニティのみで使われるのではなく、ろう者と聴者の両方が使う地域共有手話として発展することもある。

地域共有手話とは、聴者よりろう者の比率が高いコミュニティで出現し、そのコミュニティのろう者と聴者の両方に共有されている言語を指す(Zeshan and de Vos 2012; Nyst 2012)。

地域共有手話はろうコミュニティの手話の方言とは異なることに注意が必要である。

地域共有手話は、ろうコミュニティで確立している手話言語に見られる文法的な表現は限られるとされているが、独自の文法的性質がある(Zeshan and de Vos 2012)。有名な事例であるアメリカのマーサズ・ヴィンヤード島では、独自の手話が発展して島全体の社会で使用されるようになった(Groce,1985)。

地域共有手話に関する先行研究は数多く報告されてきた。海外での地域共有手話に関する先行研究として、インドネシアにあるバリ島北部ブンカラ村（de Vos 2012）・ブラジル東北部マラニョン州（Kakumasu 1968)など、多く報告されている。

日本では、奄美大島古仁屋地域手話や愛媛県大島の宮窪手話がある。地域共有手話の多くが消滅の危機に瀕しており、それらを記録することは重要である。地域共有手話は手話方言と混同されることが多い。

２.宮窪手話

宮窪手話は、愛媛県大島の宮窪漁港周辺（図3）で漁業に携わるろう者・聴者の住民によって使用される。2016年の日本の国勢調査によると、宮窪住民は2,736人、その中に宮窪手話を使用するろう者が20人存在する。現在は更に使用者が減少している。

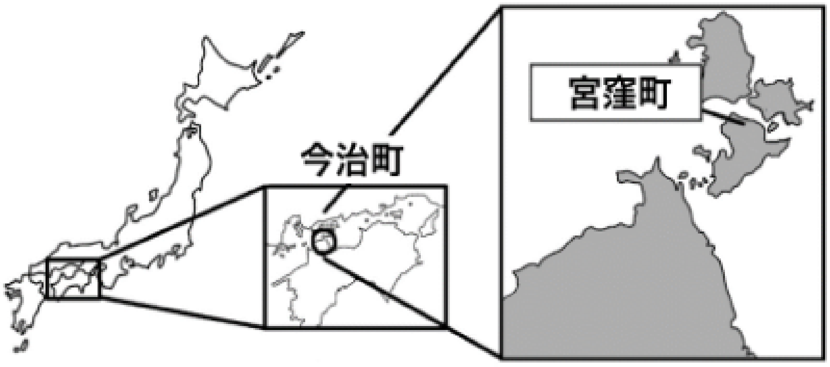

図３　愛媛県大島の宮窪

日本手話の数の表現は、地域と年代の差異がある (Sagara 2014)が、宮窪手話の数の表現は日本手話と類似性がなく、数のシステムが異なる(矢野 2014)。

タイムラインとは、過去・現在・未来の流れが体の後ろから前の空間で表される手話表現である（松岡2015:77）。手話話者は、空間に設定された「線」を用いて時系列を表す。

日本手話のタイムライン（図4）は話者の背後から始まり、前方へ進む(岡と赤堀 2011; 松岡,2015)。

図４　日本手話のタイムライン

宮窪手話のタイムラインには、身体を基準点に用いるタイムライン（図5）と天体タイムライン（図6）の2種がある。身体を基準点に用いるタイムラインは、話者の利き手側から始まり、話者の体の中心に向かって進み、未来は線上に含まれない。

図５　宮窪手話のタイムライン

天体タイムラインでは、利き手の位置を用いて、特定の時間を表現する。屋外の決まった場所にいる場合は、実際の太陽の位置に合わせて表現する必要があるため、位置もその都度に変更される(Yano and Matsuoka 2018)。

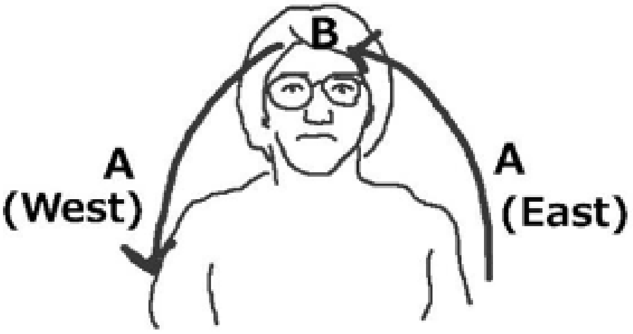

図６　宮窪手話の天体タイムライン

天体タイムラインはインドネシアのカタコロク (Kata Kolok)の地域共有手話(de Vos 2012, 380–81)や、音声言語話者のブラジル先住民が話しながら視覚的補助手段を使用する例(Floyd 2016)が報告されている。

３.ろう者と聴者が手話研究をする場合

これまでの学術研究の方法には聴者の文化が強く反映されている。しかし、ろう者と聴者のやりやすい研究方法は同じとは限らない。下記のような点を考える必要がある。

・ろう者1人よりも2人の方が安心（学会参加など）
・手話通訳者（研究者が手話ができない場合）
・筆談・手指日本語（日本語対応手話）の限界
・相談できる研究者（ろう者に対する態度）
・ろう者の学術日本語のサポート

ろう者に客観的かつ正確な情報を提供することが重要である。

・手話とろう文化に関する正確な情報を発信・共有する方法
・ろうコミュニティで確立した手話の研究→手話教育・ろう教育への影響が大きい
・地域共有手話の研究→ろう者の生活史の記録と継承

研究にろう者の視点を反映させることも忘れてはならない。

・インタビューや説明の方法（視覚的に情報を提示）
・異文化への配慮
・ろう文化について知る

聴の研究者への提案

・手話を勉強する
・ろう者と一緒に言語学イベントを企画・実行する
・ろう者の研究仲間を作る
・ろう者の興味に合わせた研究活動を支援する（自分の得意分野とズレていても前向きに取り組む）
・一緒に学会出張して、海外の研究者の交流の機会を増やす

参考文献

De Vos,Connie (2012) Sign-spatiality in Kata Kolok: How a village sign language in Bali inscribes its signing space. Unpublished doctoral dissertation,Radboud University.

Floyd,Simeon (2016) Modally hybrid grammar? Celestial pointing for time-of-day reference in Nheengatú. *Language*: 31-64.

Groce, Nora Ellen (1985) *Everyone Here Spoke Sign Language: Hereditary Deafness on Martha's Vineyard.* Harvard University Press.

Kakumasu, Jim (1968) Urubu Sign Language. *International Journal of American Linguistics* 34(4): 275–81.

Nyst, Victoria (2012) Shared Sign Languages. In Roland Pfau, Markus Steinbach and Bencie Woll (eds.) *Sign language: An international handbook,* De Gruyter Mouton, 552-574

岡典栄・赤堀仁美 (2011)『文法が基礎からわかる 日本手話のしくみ』大修館書店.

松岡和美 (2015)『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版.

Padden, Carol A, and Tom Humphries (1988) *Deaf in America: Voices from a culture.* Harvard University Press.

Sagara, Keiko (2014) The Numeral System of Japanese Sign Language from a Cross-Linguistic Perspective. Unpublished MA thesis, University of Central Lancashire.

Stokoe, Jr., William C. and Dorothy Casterline and Carl G. Croneberg (1965) *A Dictionary of American Sign Language on Linguistic Principles.* Washington, DC: Gallaudet University Press.

武居渡 (2005)「手話言語環境にないろう者のホームサイン」長南浩人（編）『手話の心理学入門』177-197.東峰書房.

矢野羽衣子・松岡和美・平英司（2014）「愛媛県大島のビレッジサイン（手話方言）における数と時の表現」日本言語学会第 149回大会ポスター発表.愛媛大学,2014年11月16日.

Yano, Uiko, and Kazumi Matsuoka (2018) Numerals and timelines of a shared sign language in Japan. *Sign Language Studies* 18.4: 640-665.

矢野羽衣子 (2020)「手話言語生成過程の枠組みを利用した不就学ろう者の手話表現の記述的研究-コーパスの作成を目指して」修士論文,筑波技術大学.

矢野羽衣子(2023). 手話の発生. 松岡和美・内堀朝子(編). 『手話言語学のトピック 基礎から最前線へ』. (227-247). くろしお出版

Zeshan, Ulrike and Connie De Vos (2012) *Sign languages in village communities: Anthropological and linguistic insights.* de Gruyter.

Zeshan Ulrike, Cesar Ernesto Escobedo Delgado, Hasan Dikyuva, Sibaji Panda and Connie de Vos (2013) Cardinal numerals in rural sign languages: Approaching cross-modal typology. *Linguistic Typology* 17.3:357-396.